

## タキ・オンコイの記録者 クリストバル・デ・アルボルノス

Pedro M. Guibovich Pérez

[谷口智子訳]

### クリストバル・デ・アルボルノス

スペインによるアメリカ大陸征服に続く最初の10年間、多くの移民がイベリア半島からペルーへと到着した。ある者は利益や珍しい体験への欲求により、またある者は福音を説く活動に与えられる広大な領域により引き寄せられた。また彼らは、本来自らの地位において獲得することが難しいとされる社会的な出世の可能性について、この地にて探し求めることを怠らなかった。この最後の時期に、聖職者クリストバル・デ・アルボルノスは有名な偶像崇拜の根絶を行っていた。これは16世紀の中頃、中央アンデスにて展開された先住民(nativista)運動タキ・オンコイをとがめるべく、彼が中心的な役割を果たしたというものである。

クリストバル・デ・アルボルノスの人物像は、これまでさほど注目されてなかった。Pierre Duviolosにより実現された簡潔な身体的特徴のほかに、私達は彼の歴史的な重要人物としての調査を試みたとされる他のどんな報告書もあてにしていない。悲しいことに、私達が彼について理解しているわずかで表面的な情報は、その大半が1570年から1584年の間に為された功績報告書にて把握されるものである。これは聖職者の経歴の上で、昇進を得ることを目的として為されたものである。私達は、これらの資料や記録に基づく他の出所に由来するものから、その人物像の素描を試みるつもりである。

クリストバル・デ・アルボルノスはおそらく1530年頃ウエルバ(Huelva)にて生まれた<sup>1</sup>。1584年に自らが50歳以上であることを述べている。また同年、彼が55歳以上であったことを明示したものも存在した。(1584年の『功績報告書』)私達は彼がアメリカに渡った時期や状況について知らない<sup>2</sup>。しかし彼はペルーに着く前に、サント・ドミンゴとヌエバ・グラナダにいた。彼はその島で大聖堂教会(iglesia catedral)の司教の職務及び教会の巡察使の職務を遂行し

---

<sup>1</sup> 1570年、Pedro de Contrares (サンルカル・デ・バラメダ生まれ)は、アルボルノスについて、「この証人の4レグア離れた場所にいる」と証言した。(『功績報告書』1570年、f.19v.)

<sup>2</sup> セビリャの対インディオス交易裁判所の記録によれば、「アルボルノスはウエルバ生まれで父ペドロ・ゴンザレス、母カタリナ・ルイスとの間に生まれた。1539年12月10日にキューバ島への船に乗船した」とある。(Bermúdez Plata 1940-46, III:63.) この記録に同名異人の疑いはない。

た。また後にヌエバ・グラナダにおいて総代理司祭(vicario)となり、再び司教区の巡察使となった。(1570年の『功績報告書』)疑いなくそのような任務に従事することにより得られた経験は、ペルー副王領での聖職者としての将来の経歴を発展させる上で、彼にとって大きな助けとなったはずである。

彼はいつペルーに到着したのだろうか?アルボルノスは1577年に、約12年にわたりクスコの司教区にて居住していたことを明示している。おおよそ1565年以降である。これと同時代の他の証言では、確かに漠然としたことであるためこの言明に反論しており、異なる時期を仮定している。(同書に)この点を解明するため、Bartolomé Muños de Alvarの証言を対照すべく、取り上げよう。彼は1570年ワマンガにてこれを示している。

「約4年にわたりクリストバル・デ・アルボルノスのことを知っています。何故なら私は、この王国におけるパイタ(Paita)の港の司祭(cura)及び総代理司祭(vicario)であり、クリストバル・デ・アルボルノスをこの港に上陸させました。そしてそこから、キトの司教Pedro de la Peña 修道士のいるピウラ(Piura)の町へと出発させました。私は、高貴な人物として記載されている者のように、大変礼儀正しく彼に対応しました。(同書に)」

アルボルノスとキトの司教は、ピウラにて居合わせた。彼は第二回リマ大司教区公会議(Segundo Concilio Provincial)に出席すべくリマへの道程におり、休憩のためおそらく何日かこの町に留まっていた。一方前述の司教は、1566年11月の終わりにクエンカに居り、翌年1月には既にリマにいたことが知られている(Vergas1962:67)。こうして、アルボルノスが1567年の初めにヌエバ・グラナダから来て、ペルーに到着したであろうことが立証される。

ピウラからクスコへの旅にて、アルボルノスはリマを通過しなければならなかった。既にインカの古き都であったその地では、大聖堂の先唱者(chantre)であり彼の同郷でもあるエルナンド・アリアスという擁護的人物(protector)を最初に見つけなければならなかった。こうしてアリアスのとりなしにより、アルボルノスは教会の聖堂参事会(Cabildo)から司教区の教会巡察使の任命を受けた<sup>3</sup>。

1568年、聖堂参事会は、彼にアレキーパの町とその地区の巡察を実行するよう委ねた。私達は現存する参考資料により、この任務が聖職者(clero)の現状を調査することに基盤をおいたものであることを理解している。特にそれらの1つは教義に関する仕事であり、インディオの村の間で福音伝道の進展を図ることを目的としたものだった。彼の任務の達成により、聖堂参事会は彼に異端審

---

<sup>3</sup> 「このクリストバル・デ・アルボルノスは、司教座に空席のあるこの街クスコにやってきて、教会の聖堂参事会から司教区の教会巡察使の任命を受けた。」(『功績報告書』1577年、エルナンド・アリアスの証言 f. 4v.)

問所の委員、及び教会の巡察使の称号を授けた。(1570年の『功績報告書』)

翌年、彼はアレキーパで行われたような巡察遂行の目的のもと、ワマンガに向かった。一時、彼はその町にて、総代理司祭やその他当時そこで教会の権威者であった者にあてがわれる住居を得ることに取りかかる。そしてこれを終わらせ、とにかく聖堂参事会により与えられた指示に従って、その地方の布教材を歩き回り始めました。こうして彼の“優れた術策や巧知、また熱心さ”のおかげにより、インディオらの間にタキ・オンゴのセクトや背教を発見した。

アルボルノスの活動に関する報告にて、その優秀さを語るのにある問題を取り上げるのが適当である。これはタキ・オンコイの発見についてである。1570年と1584年の2つの時期に、クリストバル・デ・アルボルノスは自らのことを「これを発見し、調査し、その根を取り去った最初の人物」であったと主張した。そしてこの確言を補完するため、多数の証人を召喚した。これらの大半の人は一起こるべくして起こったこととして— 明確に答えた。しかし、これらの証言に面と向かって一致しない発言をする年代記作者クリストバル・デ・モリーナがいる。彼はこのことを、パリナコチャ (Parinacocha) の布教材の司祭ルイス・デ・オルベラにより探し当てられたものである、としている。事実はどちらだろう？いくらかの証言を分析してみよう。

インカの儀式や神話に関して、1574年から1575年の間にモリーナは以下の通り言明している。

「10年前後経つでしょうか。これらインディオらの間に過ち(yerronía)が起きました。これはタキ・オンコイと呼ばれるものへの参加の方法をとるものでした。またこれは、パリナコチャの地方にて、その時機そのレパルティミエントの司祭であった聖職者兼司祭(prosbitero)ルイス・デ・オビエラ(オルベラ)の報告によるものでした。彼は、この過ちや偶像崇拜を見た最初の人物であったのです。(Molina 1959:98)」

モリーナにより述べられたことは、ルイス・デ・オルベラ自身により確認され、明らかになったことである。これは1577年、パリナコチャ (Parinacocha) にて数年前にそのようなことが起こったことを彼が述べている。

「これを目にし、そうした状態にあることを知り、74年その役職によりこれを正しました。またそこで報告を行い、この過ちや背教が王国中に広まっていることを理解しました。(1577年の『功績報告書』f. 5r)」

しかしオルベラは先住民にその活動を行わないようにさせるだけでなく、偶

像崇拜を弾圧することに従事し、市民の権威者や副王領の教会の権威者に訴え出た。

「最終的に、総代理司祭であるルイス・デ・オルベラは、その地方、またオカリ (la de Ocarí) で罰することをし始め、リマの王立アウディエンシアに情報を送りました。そして大司教やチャルカス (Charcas) 及びその他の地区の司教、またクスコ司教区の管理者である修道士ペドロ・デ・トロらもこれを暴き始め、全てを終えるまでに7年以上の期間を要しました。(モリーナ 1959:101)」

モリーナによれば、それが1565年頃以降のことであれば、クスコにおいて教会権威者が先住民運動の存在について知識を得ていたという。但し、その当時、聖堂参事会がそれと戦うための何らかの方策を持っていたとしても、私達にはそれが確かなことかわからない。この地方のインディオに教義を説いた教区司祭 (doctrineros) の手に委ねられて自発的にそれを止めたとされている。疑いのないことは、1569年に、この力強い儀式や偶像崇拜の進展に干渉することを決めたということである。この最近の推測は、先唱者エルナンド・アリアスの証言により補完されているようだ。彼は、1577年にアルボルノスとともにワマンガの町へ巡察のため送られたようだ。

[その地区においては]「何故なら、その時機タキオンゴイと呼ばれる偶像崇拜と似たようなことが引き起こされたからです。そしてこれを罰するよう彼に任せられ、そう為されたのでした。(1577年の『功績報告書』f. 4v)」

その役割について、Pedro Barriga Corro は次のように述べた。

「彼 (アルボルノス) はララマティ (Lalamati) のレパルティミエントにていくつかのワカを発見しました。そこはクリストバル・デ・アルボルノスが通知により教育を行っていた場所でした。この通知はクスコの聖教会 (Santa Yglesia) の聖堂参事会長 (Dean) 及び聖堂参事会により出されたもので、セクトアイラ タキ・オンゴの説教師 Juan Chono を捕らえたことによるものです。何故ならそのワカを発見した時、Juan Chono は私から逃げて来ていたためです。私は彼が何のために逃げ去ったか、その理由を知りませんでした。そしてクリストバル・デ・アルボルノスが聖堂参事会からの隠し立てのない言葉を受けるとすぐ、自らの備えた良き術策や巧知、熱心さをもってセクトやアイラ・タキオンゴと呼ばれる背教を暴き始め、発見しました。(1570年の『功績報告書』f. 53v)」

この時期、その活動を弾圧するための発意が、教会の聖堂参事会 (Cabildo Eclesiástico) から出された。巡察でのアルボルノスは受け入れた指示に対して妥当な人物だった、と Barriga 神父は保障している。ところで、ワマンガへ彼を派遣する決定に関しては、慎重に検討したに違いない。特に教会（聖職者）の巡察遂行により認められた能力、あるいはアレキーパ地方にてその成長が証明されたとする能力を考慮したのだろう。

しかし、この動きが、アルボルノスが最初にタキ・オンコイを発見したかどうかについての疑問は、未解決のままである。私達は、少なくとも 1565 年にタキ・オンコイの情報が知らされていることを確信しているが、モリーナ同様それをオルベラによるものとして一致させる見解を出した。他方、先述したように、アルボルノスが 1567 年初頭にペルーに到着したことも述べた。では彼がタキ・オンコイ発見で優位に立つ巡察使であるという可能性を、どうやって証明するのだろうか？

もしアルボルノスがタキ・オンコイ発見にいたる最初の人物ではないとしたら、同様の責任をもって任務を遂行した役目は誰なのだろうか？再びモリーナの証言を引き合いに出す。私の考えによると、この事柄全てを理解するための手がかりである。1584 年に彼は次のことを明示している。「聖堂参事会員 (canonigo) クリストバル・デ・アルボルノスは、タキ・オンゴのセクトと異教を最初に発見した人物の一人です。」(1584 年の『功績報告書』f. 20r) これはまた別の時期に書き足されている。

「巡察して歩いた場所でのこの聖堂参事会員の持つ思いやりと配慮により、またそれに関して行った説教や罰を通して、主なるイエス・キリストに多くの良き貢献がなされる中、あの不幸な出来事の大部分がやみ始め、終わりを告げました。この聖堂参事会員は、あの時期巡察を行っていた幾らかの者のうち、この事柄により多く、より上手く従事した者の一人でした。これは、巡察使としての権威同様、それをするに当たっての思いやりや配慮、また説教が功を奏したためです。(同書 f. 20r)」

モリーナは以上のように結論づけているが、アルボルノスが偶像崇拝を発見した最初の人物であったとされることを認めてはいない。しかし、それがアルボルノスの成果を否定するわけでもない。逆に、司教総代理 (provisor)、総代理司祭、巡察使、特に根絶者としてその才能を際立たせている。「あの時期巡察を行っていた幾らかの者のうち、この事柄により多く、より上手く従事した者の一人でした」とのモリーナの証言は、十分明白である。またこの最後の証言は、興味深い結論である。何故なら、根絶に従事した他の者がいたことを明かしているからだ。この件について、たとえ、ルイス・デ・オルベラ自身がその

中に含まれている可能性があったとしても、私はこれ以上言及しない。アルボルノスは皆の中で際立っていた。「その思いやりと配慮、またそれに関して行った説教を理由とするとともに、巡察使であるがゆえの権威により」（モリーナのみならず、他の全ての同世代の者がそう述べている）また彼の仕事の成果として、偶像崇拝が「やみ始め、終わりを告げた」としている。私達が理解していることは、そのような稀に見る人物アルボルノスについて、重要な成果が存在することである。

クリストバル・デ・モリーナの証言は何度も引用され、幾つかの根拠により全て信用に値するものである。モリーナはその人生の大半をクスコにて過ごした。そこで彼は先住民らの施療院(Hospital de Natulares)における主任司祭(párroco)として司教の仕事を遂行するだけでなく、2度にわたり教会巡察使を務めた。むしろトレドの時代には、評判の良いケチュア語研究者(quechuísta)で、インカの歴史の分野に造詣の深い人物だった。教会の仕事に従事する上での彼の経験と同様、その地方や住民、言語についての彼の知識は、その公表において議論の余地ない権威を与えた。司教区内で行われた福音伝道に関して起こった事柄を証明するのに、彼をおいて他に誰がいるというのだろうか。さらに、アルボルノスがモリーナに対して特別な敬意を示していたというのは明らか事実である。これについては、2つの時期(1577年と1584年)に自らの『功績報告書』の証人として彼(モリーナ)を召喚したという事実が証拠になる。そしてこの評価は、アルボルノスがともに巡察を実行することをモリーナに提案するに至った。こうしてこの最後の巡察にて、未だ根絶されない呪術や偶像崇拝が今後存続しないよう、網状道路の清掃車のごとく、彼が通訳人(lengua)として参加したということだ<sup>4</sup>。(1584年の『功績報告書』f. 20v)しかしここで、ワマンガにおいてアルボルノスにより実行された、巡察についての状況報告に戻ろう。

アルボルノスがその地方に入り込めば入り込むほど、またその住民と付き合い合えば付き合い合うほど、その調査は成果を上げた。この運動の重要性がその地で明らかになるとき、同時にそれが将来において彼に利益をもたらすものになったのは確実である。ただしそれは、この巡察に出資した彼自身の事柄について、また彼の財産により通訳や補佐する役人に対し支払いがなされた事実について、相手に理解されて初めて成り立つものである。こうして、教会の権威者に従属する巡察使として始めた事柄が、個人の利益により導かれた企てに全て置きかえられた。巡察は1571年の初めまで、妨害により延期せざるを得なかった。アルボルノスはそれに関して十分過酷な仕事であることを大いに示した。またそ

---

<sup>4</sup> 証人たちから証言を引き出すことについては、アルボルノスは幸運な男だった。この状況は決して稀なことではなかった。なぜなら、修道院に属していない在俗司祭が財産や富を

の地方による行程において、コレヒドールや公証人としてペドロ・ブラスコやバルトロメ・ベロカルが付き添った。さらには、「この王国で最も優れた最も有名な通訳人の一人」とされるヘロニモ・マルティン神父も伴った。巡察でのアルボルノスの行動様式同様、インディオから証言を得るのに有効とされた手段を再現するため、私達はワカを発見すべく知識において、十分詳細な方法として公表された巡察使自身による証言 (Duviols 1984)、及び 1570 年のワマンガにおける『功績報告書』にて明らかにされた証人の証言を参考にする。

1570 年 9 月、新たにクスコにてタキ・オンコイが発見された。ここは、ワマンガで行われたことに関連し、聖堂参事会に報告が為された場所である。彼の行動は、それが認められるばかりでなく、さらには聖堂参事会が彼に権威を与えるべく決定を申し渡すほどのものだった。それは、「巡察を中断したワマンガの地区に関し、残りの箇所においても巡察使として決定の申し渡しを行使せよ」というものである。(『公会議の判決文』 f. 70r) この時期、彼は司教座聖堂 (Catedral) の聖堂参事会員としての任命を受けた<sup>5</sup>。

ワマンガでの帰路、アルボルノスは再び巡察を始めなければならなかった。しかし、それほど長い期間ではなかった<sup>6</sup>。そして唯一の重要な出来事が、彼の仕事の流れを変えることとなった。それは 1570 年の 12 月、その地方に副王フランシスコ・デ・トレドが着任したことによる。こうして教会の聖堂参事会は、副王への敬意を表明するため、聖堂参事会員エステバン・デ・ビリャロンとルイス・デ・オルベラをワマンガの町に送ることを決定した。またアルボルノスも同様にこの町へ行った。そしてこの統治者との接近を試みた<sup>7</sup>。しばらく後、トレドの指示により、彼はフアン・デ・パロマレスと共にパリナコチャとアンダワイラス (Andahuaylas) の地方を訪ねた。そしてオロペサの町の創設に関与した<sup>8</sup>。

---

持ち、管理するのが認められていたからである。

<sup>5</sup> それは 1570 年 9 月から 1571 年 5 月の間である。(『功績報告書』1570 年の前書き参照。)

<sup>6</sup> アルボルノスによれば、「私は 1568 年に、カストロ学士が支配したこの地域、空位ある教会のアレキパの町を訪れた。彼らは私に 1569,70,71 年にかけて、ワマンガ地方に巡察に行くよう要請した。なぜなら、神がその地域の、我々の信仰やキリスト教を受け入れない先住民の背教を諫めるためである。」(Duviols, 1984:215)

<sup>7</sup> 「1571 年にやってきた副王トレドは、この証人と Esteban de Villalón を司教座聖堂の空位の聖堂参事会員につけた。」『功績報告書』1577 年、ルイス・デ・オルベラの証言 f.5v.

<sup>8</sup> エルナンド・アリアスによると、副王トレドは、司教座聖堂参事会に 16 人の聖職者を教会巡察使として任命するよう要請した。その中には、アルボルノスも含まれており、「幸運なことに、彼はパリナコチャス管区の巡察を扱っている」と書かれている。(『功績報告書』1577 年、f.4v.) それについて、クリストバル・デ・モリーナは、副王トレドがアルボルノスを指名したと述べている。「アルボルノスは、パリナコチャス管区からアンダワイラス地方まで、広大なチンチャイスーユの総巡察使である。」(『功績報告書』1577 年、f.6r.) 『総巡察使の本 Libro de la Visita General』でも、ロメロは次のように書いている。「Joan de

アルボルノスの絶頂期はセバスティアン・デ・ラルタウン司教をもって到来した。彼はこの司教にとって信頼のおける人物となる。そしてこのことは、教会の巡察使としての古くからの任務においても確認できる。1575年にラルタウンは、アンダワイラスやワマンガ地方に対して司教による巡察を始めた。そして彼が不在の間、その司教総代理及び総代理司祭としてアルボルノスにこれを任せた。(1577年の『功績報告書』；Esquivel y Navia 1980, I:236) その仕事振りについては、私達に次のような興味深い報告を残している。それは、コレヒドール〔・デ・ロス・インディオス〕の職務の存在に関して、リマのアウディエンシアとラルタウンが主張した争いの仲裁である。

インディオのキリスト教化に対応しなければいけない聖職者不足により、16世紀中頃からクスコ司教区は福音伝道における補佐として、まさにそのインディオらに頼ることを決定した。これらの補佐役は、より信頼のおける能力のある人物の中から選ばれ、税を免除され、インディオの住民台帳を作らなければならなかった。これは、死亡、出生、婚姻の調査書類をもってインディオの男女をミサに導くためである。例えば、祈ることを彼らに強い、彼らの家庭での生活を監視するものだ。さらには、信仰深いインディオが伝統的な礼拝の儀式や習慣を保持していることを、もっと近い場所に住む司祭に報告しなければならなかった。(Duviois 1977:283-284) しかし 1575年、リマのアウディエンシアは彼らが法に背いたことを引き合いに出し、コレヒドール〔・デ・ロス・インディオス〕の職務を廃止した。その年の10月16日付のアウディエンシアへの彼の反論に関して、アルボルノスは次のように言及した。

「布教村に配置されたコレヒドール〔・デ・ロス・インディオス〕は、長年この地にて武装を伴う (con casquillos) 権威を保っています。これは主なるイエス・キリストや陛下への奉仕に都合が良いとされるものです。何故なら、彼らはインディオらの間にすでに置かれているキリスト教布教村の補佐役であり、これらのレパルティミエントにて犯される偶像崇拜や他の重い公な罪に警告を与えます。また彼らはカシーケやインディオらが尊敬する人物であり、このことは彼らが似たような罪を犯すのを自制する理由ともなりました。もし彼らの間に調査すべく、前述のことを知るべく、また担当する司祭及び総代理司祭にこれを告知すべき者らがいなければ、彼らは大いなる自由をもってそれを行ったでしょう。そして陛下が自らの管轄区域に対して行なう指示を越えることのない範囲で、この王国の司教や大司教によりこれが認められました。この王国の副王である、もっとも優れたフランシスコ・デ・トレド様により行われ

---

Palomares と、彼の教会巡察使仲間のクリストバル・デ・アルボルノスは、クスコ司教座聖堂参事会員であり、その司教区の司教総代理である。」(Romero, 1924:123)



たこの王国の統括的な巡察に、彼（ラルタウン）が認められ、現在そうであるように… コレヒドール〔・デ・ロス・インディオス〕の存在が良きこととして理解されています。(Lisson 1944-47, II:710)」

アルボルノスは、アウディエンシアにより命令に対し、その再考を促した。ほとんど同時期に、ラルタウン司教もコレヒドール〔・デ・ロス・インディオス〕の職務の復活を願い出、インディアス枢機会議(Consejo de Indias)に手紙を出した。そして全てがアウディエンシアによる決定の申し渡しにより制限付きの適用を受け、差し戻された。またインディアス枢機会議は、最終的にクスコの教会権威者からの要求に従って行動した。それゆえ既に16世紀末には、副王領のいたる所でコレヒドール〔・デ・ロス・インディオス〕がその役割を果たすのが見られた。(Duvols 1977)

1579年にラルタウンは再びクスコを留守にした。この時は、その町の数人の聖堂参事会員や住民が表明した彼に対する告発に応じるため、副王トレドによりリマに呼ばれたが、それは、十分の一税の取りたてに関し為された行き過ぎの行為を発端とするものである。出発する前に、ラルタウンは欠員のあるクスコ司教区における司教総代理及び総代理司祭として、アルボルノスを二度にわたり任命した。(Vargas Ugarte 1953-62, II:59; 及び1577年の『功績報告書』)

ラルタウン司教はその仕事の当初より、聖職者や地方団体のメンバーとの絶え間ない対立があり、それゆえ、特徴的な人物である。司教(Obispo)により起こされた一連の弊害は、ラルタウンに向けた非難の声明文を発するまでに至った。特にリマ異端審問所の法廷委員でもある聖堂参事会員 Pedro de Quiroga との意見の相違はよく知られたことであった。また、その時代の他の司教同様、ラルタウンは信仰を理由とした法廷の権限を認めることに反抗的な態度を示した。こうして様々な方法により、彼の業績への妨害が為された。異端審問所との闘争の絶頂期は、ラルタウンが禁固を最初に命じられた時だった。ラルタウンは、既婚女性との関係を疑われ、Quiroga にその経緯がのちに暴露された。こういった不貞行為は、異端審問所の権威に対する重大な侮辱を意味し、その影響は予想以上のものだった。しかし、ラルタウン司教に対し直接に裁判は行われず、代わりに彼の近い者が犠牲になった。リマにいるラルタウンの不在をいいことに、アルボルノスが訴えられた。彼の居住権問題、あるいは、Pedro de Quiroga を脅迫した疑い、また一般的な異端審問官あるいは弁護士の資格取得に関し、さらに典札規則違反に関して、彼は訴えられた。(Medina 1956:I:165) 私達はこの経緯の進展について詳細を知らないが、アルボルノスが自由の身となったのは明らかである。見たところ、彼への責任追求が不問に付された。いずれにせよ異端審問所とのこの事件は、秘密裏に終わった。

長い間、我らの登場人物（アルボルノス）は、ある問題に何度も巻き込まれ

た。1582年にリマ大司教区公会議の内部で、検察官クリストバル・サンチェス・レネドが、司教総代理アルボルノスに対する訴訟を開始した。その件については、その任務が大司教の権限に不服従であり、彼らの巡察の間に発見されたワカによる財産を取得し、司教総代理の任務遂行においても独断的であることがその理由とされた。またさらには、居住の判断に従わずにいたというものであった。疑いなくこの告発は重大な結果を生じさせた。書類の解釈からは、原告が誰であるか全てにおいてははっきりしていない。アルボルノスにとって問題は「自らの競争相手であり妬み深い彼ら」だった。また公証人フアン・デ・アンドゥエサにとっても問題は、「重要な権力ある人物」だった。(1584年の『功績報告書』) その作成者が誰であるかは無関係に、その告発の原因に関し、論争の渦中にあるクスコ司教により、アルボルノスの身辺は調査されねばならなかった。公証人 Lucas Moreno は次のことを示している。「妬み深い数人により、これが為されたのは確かである。私はクリストバル・デ・アルボルノスがラルタウン司教の寵愛を受けていたことを知っている。ロス・レイエスの地方公会議 (Concilio Provincial) において彼は中傷され、彼は自らに対する決定の申し渡しのため呼び出されたのである。」(Ibid., f. 41r)

リマにてアルボルノスは、公会議で論争が広がっていることに気づいた。たとえ逆説的な結果であっても、この状況は我々が予見するような幸運を彼に与えることになった。そしてこの審議が開始されて間もなく、この町のコレヒドールとしてリマに住むクスコの会計係 Diego de Salgado は、ラルタウン司教に対して責任追及が 23 章にも及ぶ報告書を提示した。こうして公会議がこの告発を担当すべきか否かに関して、列席する司教らの間で論争が起こった。リマ大司教 Mogrovejo と司教たちは公会議の管轄にあると主張し続けた。また逆に、Tucumán, Santiago de Chile, La Plata, Quito, Río de La Plata の司教は逆の意見を持っていた。前者は副王 Martín Enríquez de Almansa の支持をあてにし、後者はアウディエンシアの支持をあてにしていた。間もなく論議は公然とした対立に発展した。事がこのように運ぶ中、1583年3月7日に起こった副王の死は、会議において、また大司教との対立において、ラルタウンの支持者らに一時的な優位を与えることとなった<sup>9</sup>。まさしく時はアルボルノスの訴訟が扱われる時期だった。状況は確彼にとって大変都合のよい結果を生んだ。それは、当時最も権威ある人物ラルタウン司教にサポートされていた頃以上であった。

アルボルノスは、それらが偽りであるとみなされたことにより、コレヒドール Sánchez Renedo から提示された任務を拒否した。そして申し開きにおいて次のように表明した。

---

<sup>9</sup> 1582-83年のリマ大司教区公会議の間の闘争の詳細については、以下を参照。(Vargas Ugarte 1953-62, II:59 参照)

「私はこのように良き判事として居住権を与えられ、判決が下され、宣言された。それは、この町のいとも尊き司教殿のもと、欠員のある聖堂参事会長及び聖堂参事会によって、そのような司教総代理また統括総代理司祭として任命され、巡察使であったことに関してであります。(『公会議の判決文』, f. 69v)」

アルボルノスの口頭弁論は、都合良く 3 月 23 日申し渡された判決を通じて、ラルタウンにより援護された。そして 4 日後、その裁判を任された判事、La Plata の司教 Alonso Granero de Avalos は、この聖堂参事会員に対し有利に裁決した。(Ibid., f. 71r) 私達は、我らの登場人物(アルボルノス)がその見解を知った後、クスコに戻ったか、逆に公会議の最後までリマに留まったかを知らない。この審議は内部の対立にもかかわらず、10 月 13 日まで延期された。その数日前である 9 日に、セバスティアン・デ・ラルタウン司教が亡くなった。こうしてクスコの聖堂参事会(Cabildo Eclesiástico)は、アルボルノスを欠員のある司教区の司教総代理に任命した。それは、このような役職が彼の手に入る 3 度目の出来事だった。

何年か過ぎて 1591 年のことである。アルボルノスは第 4 回リマ大司教区公会議の審議に、Gregorio de Montalvo 司教の秘書として同行した<sup>10</sup>。

聖堂参事会における彼の経歴についての特徴から、この出来事は、かなりかけ離れている出来事である。判事が正会員であり、彼の得た唯一の昇進が、彼の努力にかかわらず先唱者の職であったことは確かである。1594 年に司教総代理の役職を解任され、1595 年には短い期間ではあるがそれに復職した。(Esquivel y Navia 1980:I:265, 266, 274)

とはいえ、彼がさらに年を重ね、世紀末にはビルカバンバの地方をくまなく歩き回っていたものと私達は認識している。これは Marqués de Cañete の指示によるもので、ここで彼は幾らかの鉱山を調査した。これはその時期、鉱山労働者の定住を視野に入れた働き手を供給すべく、ミタ(強制労働)の制定の可能性を検討していたからだ。(『王への手紙、1602』) Baltasar de Ocampo によると、彼は San Francisco de la Victoria de Vilcabamba の二番目の町設立に参加した。さらには Puquiura の定住に際し、金属に関する知識をも得ていた。(Ocampo 1923:161, 167-169)

また彼は、San Antonio Abad の神学校 (Colegio Seminario) の創設において Antonio de La Raya 司教と協力し、これを行った。たとえこの高位聖職者との

---

<sup>10</sup> 司教座聖堂参事会の記録によると、1590 年 9 月 25 日、モンタルボ司教は、その公会議を補佐する部下が、クリストバル・デ・アルボルノスであったことを覚えていた。(Vargas Ugarte 1954, III:120.n.11 参照) 同様に以下も参照のこと。(Vascode Conreras y Valverde, 1982:102)

良き関係が保たれなかったとしても、この事件は少なくとも 1602 年に王に対してアルボルノスが書いた手紙からは除外されている。そして 1 年前、この町における大学設立の必要性に関する Pedro del Peso de Vera の申請にて出された証拠にて、証人として召喚された。(Vargas Ugarte 1938:108) アルボルノスの死は、おそらく、1610 年より前に、クスコにて訪れたはずである<sup>11</sup>。

我々が見てきたように、クリストバル・デ・アルボルノスの伝記は、多くの興味や華々しい様相を示したものではない。そこにおいて際立つ唯一の側面は、偶像崇拜の根絶者としての活動に関係しているということである。この状況が介在しない場面において、ペルー副王領における彼の存在は、はっきりしたものではなかつたろう。

さらに、薄明かりの中で残された彼の伝記の側面は様々である。私達は、彼の知識形成にかかる全てのことを無視する。たとえ彼の人生における晩年に、アルボルノス自身が教会法(cánones)を修業していることを自慢していたとしても、疑問は残る。同様にケチュア語修得においても、彼の言語能力についても確信が持てない。一方、年代記の作者 Felipe Guamán Poma de Ayala との繋がりを明確にすることは興味深い。双方の人物がいつ、どんな状況において知り合いになったかに関する疑問は、依然と残っている<sup>12</sup>。

私は、クリストバル・デ・アルボルノスを取り巻く背景について、現在の私達の認識上、未だ調査すべき多くの事柄が残っているものと断定することができる。そして書類保管庫での細部の追求は、恐れられた偶像崇拜根絶者の伝記的輪郭を、より高度な明確さをもって描写することを疑いなく容易にするだろう。

### いくつかの記録

3 通のクリストバル・デ・アルボルノスによる『功績報告書』は、セビーリャ

---

<sup>11</sup> Bartazar de Ocampo は、1610 年ごろ書いた『ビルカバンバについての報告書』の中で、アルボルノスがすでに故人になったと述べている。

<sup>12</sup> Duviol も Adorno も主張しているように、ワマンポマはアルボルノスがワマンガ地方の「偶像崇拜根絶運動」の巡察使だった頃、彼の通訳だった可能性がある。少なくともこのクロニスタは、アルボルノスの巡察記録について適切に三回は言及しているようである。「教会の総巡察使殿、この高位聖職者のおかげで、この国のすべてのワカや偶像や魔術が完璧に描かれた。それはキリスト教の正義だ。」別のパートでは、「聖なる教会の総巡察使であるクリストバル・デ・アルボルノス殿が、魔術師たちを懲らしめた。」最後に、「この素晴らしい正義は、狂った神父たちや、傲慢な者を懲らしめ、インディオたちの悪魔やワカや偶像を罰し、燃やし、壊した。インディオの魔術師、あるいは魔女たちや、誤った偶像崇拜者たちやタキ・オンコイを罰した。(中略)クリストバル・デ・アルボルノス殿のおかげで、インディオたちに隠されていたすべてのワカや偶像が暴かれ、破壊された。」

(Guaman Poma 1980 I:253, 257; II: 638) アルボルノスとワマンポマの関係については、以下を参照。(Duviol 1984, Adorno 1978, López Baralt 1988)

にあるインディアス古文書館 (Archivo General de Indias) のリマのアウトディエンシアに関する棚の一件、書類 316 にまとめられているのが Luis Millones によって見つかった。これと同様の書類の綴りにおいて 1584 年の『功績報告書』における他のコピーが存在する。40 年代 Rubén Vargas Ugarte (1947:92) は、これらの記録の存在を知らせた最初の人物だった。後に Víctor Barriga (1933-54, IV:122-135, 293-301) は、16 世紀のペルーにおけるメルセス会について、その作品の中で 1570 年の『功績報告書』についての要約を複写した。そして最終的に 1971 年、完全にそれらの報告を Luis Millones が公刊した<sup>13</sup>。

編年体の順において、最初の報告は、アントニオ・デ・オスナヨの前で、1570 年の 3 月から 4 月の間にワマンガにて書かれたものである。その頃アルボルノスは、クスコ大聖堂の聖堂参事会の命により、この地方を巡察している状態にあった。そして証拠を立証する任務に従事するため、巡察を中断した時期もある。これは巡察が開始されて間もなく起こったことで、彼の兄弟アントニオに仕事が引き継がれた。証言は、ここで彼が行っていた教会の巡察に対する報酬を強調するものであった。特に、インディオに対する福音伝道や、タキ・オンコイの暴露に関わる事柄に関するものである。ここで初めて、彼は自らが暴露したものに対する第一発見者であるとの主張をした。我々はその点について、上記の通り異論を述べている。

1570 年の『功績報告書』において召集された証人は多数いた。それらには、エンコメンデーロの Diego Gavilán, Baltasar de Hontiveros, Amador de Cabrera, Juan Palomino, Juan de Mañueco, 住人の Cristóbal Peña, Pedro de Contreras, Diego Romaní, Gómez Serrano, Antonio de Oré, ローマ法王の公証人 Bartolomé Berrocal, 会計士 Diego de salazar, 聖職者 Jerónimo Martín, Francisco Gutiérrez, Cosme Vélez de Mazuelos, Vicente Lorenzo Bravo, Pedro Barriga Corro, Bartolomé Muños de Alvar, Juan Marín, Pedro de Prado, Hernán Ximénez Villanueva, そしてこの町の司祭及び総代理司祭 Diego de Abrego, La Merced 修道院の高位聖職者 Cristóbal Hordóñez 師、Santa Clara 修道院の総代理司祭 Francisco de Zamora 師、San Francisco 修道院の属管区長 Pedro de Almonacid 師がいた。

文書を注意深く解釈すると、全ての証拠に対し同一の利益が絡んでいないと確証せざるを得ない。教会の巡察により多かれ少なかれ影響を受けたエンコメンデーロのような幾らかの者、あるいはアルボルノスの秘書であった Bartolomé Berrocal は、偶像崇拜根絶運動を復活させるため、また先住民運動の本質を知

---

<sup>13</sup> Cuernavaca, CIDOC, 1971. \*Sondeos 79. Una colección de estudios sobre el fenómeno religioso en América Latina.)

るため、特別な権威が与えられた。また文書に特徴のある『功績報告書』は、必ずそこに居ることを申し出る証言に関し、幾分か真実性に疑いを抱かずにはいられない。特に、ある程度の単調さをもって、何らかの決まり文句や答えの繰り返しが指摘される部分がある。一方、まれなケースを除いて、証人の大部分を確認することは可能である。あらゆる登場人物の中で、ヘロニモ・マルティン神父なる人物には特に興味深いものがある。彼は通訳人として大変評判がよかったと言われているが、彼の伝記はまったく知られていない。

最初の報告が書かれてから7年が経ち、アルボルノスはクスコにて欠員のある本部司教区の司教総代理の職に2度にわたり従事している。この年、セバスティアン・デ・ラルタウン司教が自らの司教区における司教巡察のため忙しくしており、町の外にいた、という事実を回想すると良いだろう。このような状況において、アルボルノスはインディアス枢機会議に申請を行った。これは、自らがクスコにおける前述の司教区全てにおいて、あるいは前述のワカや偶像の根絶、またインディオらの平定に係る地方において、従事し、かつ従事することを可能とするための特別な委任の懇願に係ることである。彼は頼みの綱として、巡察使や根絶者としての自らの経験を述べた。そしてその町の住民や聖職者らからの支持を明確に示すため、彼らを召集している。これは、第二の『功績報告書』に係るものである。

その際の証言が役立った者の中には、次の者がいる。先唱者 Hernando Arias, 助祭長 Francisco Toscano, 秘書 Luis de Olvera, 司教座のある聖堂参事会の全てのメンバー(聖職者 Cristóbal de Molina, Cristóbal Ximénez, Pedro Núñez)、弁護士 García Rodríguez, Miguel Cuéllar, 管長 Gerónimo Costilla, 通訳人(lengua) Hernán Bravo, Luis Palomino, Gómez de Tordoya, 指揮官 Antonio Pereira, Martín de Meneses, Martín Dolmos。彼らの幾らかは、1584年の『功績報告書』において再び登場するだろう。

ここ近年、アルボルノスの晩年について語る際、クスコにおけるその三番目及び最後の『功績報告書』が公表された。そこにははっきりと、この聖堂参事会員の十分意欲的な要求が明らかにされている。ただ既に、巡察使や聖職者としての自らの才能を強調したり、偶像崇拜根絶運動を発展させるための特別な権威の懇願を行ってはいない。今度は大司教区や要職につくのを切望している。特に彼のねらいは、ラルタウン司教の死に際し、前年から欠員となっていたクスコ司教として配属されることであつた。

こうしてその証言に関して、証人が供述するよう呼び出された。その名簿には次のような有名な人物の名前も含まれる。巡察使 Damián de la Bandera, 征服者 Alonso de Mesa, Mansio Sierra de Leguisamo, 司教 Tucumán Francisco de Vitoria、同様に Cristóbal de Molina, Gómez de Tordoya, Rodrigo de Esquivel などである。

1584年の『功績報告書』は、二つの文書を伴い提出されている。これらは、アルボルノスの野望についてそれを擁護するものである。1569年から1571年にかけて、ワマンガにて実行された偶像崇拜根絶運動についての『功績報告書』は、クスコ大聖堂の古文書保管所に保管されていた書類が教会の聖堂参事会の公証人により引き出された時、推敲されたものである。しかし、残念なことに今日では紛失されている。もう一方は、リマにおいて開催された第3回リマ大司教区公会議を味方につけた1583年の判決文である。

14年もの間、クリストバル・デ・アルボルノスは教会の階級制度内部における重要なポストを得ることに苦心していた。そのため、これらの証拠は任務を達成すべく彼により為された努力を再現したものであることがわかる。また同時に、こうした主張の変遷をたどることを可能にする。結局1586年に、インディアス枢機会議はその出来事を調査した。欄外の注釈にもあるように、3つの証拠が全体としての審理内容だった<sup>14</sup>。しかし何年もの間、国や教会に対する善行からは実際あまり多くの貢献が為されず、また彼の味方として表明された証言もそれほど多くはなかった。こうして判決は不利な結果となった。インディアス枢機会議の申し渡しは、その年の4月22日、マドリッドにて決定され、十分簡潔に次のように述べられた。「依頼の件については却下する。これらインディオらの根絶に関しては、副王や司教に係ることである。」待たされた時間は長く、無駄だった。にもかかわらず、我らの登場人物（アルボルノス）は野心的な宿願に固執したのだろう。

1602年、彼は王に対し長い手紙を書いた。これは、クスコの司教区が直面していた事柄に係る状況を、詳細な形で彼に提示するものだった。そしてアレキパーで自らを高位に就けるよう、司教区の分割を提案する、といった要求を行った。また同時に、司教ら、特にAntonio de La Rayasの統治方法を批判している。彼は、公教要理の教師たる司祭(*curas doctrineros*)、また教会の巡察使の立場として、インディオらが虐待の対象とされている事実を訴えたのである。

「陛下はこれらの貧しきインディオらを覚えておられます。そして聖職者らを通して、インディオらが現状に対する報いを受けるだけの十分な施しをしているものと考えてみえます。しかし私達はその地（ペルー）のものについて何も与えてはいませんでした。スペインの物について十分報いるのみです。司教も聖職者も修道士も修道女も副王も聴訴官も代官も、また隣人も兵士も、全て

---

<sup>14</sup> 関係書類は以下参照。「1584年リマ。学士クリストバル・デ・アルボルノス、クスコの司教座聖堂参事会員はあることを依頼した。ここに司教が言うことを記録する。/報告評定官である学士Gonzalez/書記Juan de Ledesma/偶像崇拜を多く扱ってきた検察官の意見は、この司教座聖堂参事会員に対し、司教座聖堂参事会とリマ大司教区公会議の決定に従え」というものだった。

の者が彼ら（インディオ）をあてにし、奴隷として扱い、覆い隠すかのようです。それ以上に残念に思うことは、その恩恵が再び彼らの痛みや労働に変えられてしまうような事柄を、陛下自身が言い渡すことです。（『王への手紙』“Carta al rey, 1602” f.2v）」

最後の部分にて、トレド、カネエテ、ベラスコの各副王統治の間、ワンカベリカやビルカバンバの地方において自ら展開した活動を言及している。そして何年もの間、王国に尽くしてきた功績への理解を遠慮がちに要求しながら手紙を終えている。手紙は確かな失望や恨みの様相まで漂わせ、見たところ決して実りのあるものには見えなかった。

### 本論文について

記録に基づく資料体の刊行において、次のように推測される。句読点に関して、また大文字、小文字、そして活版印刷の記号の使用に際して、1961年における「スペイン語圏中南米歴史資料転写のための規則」に沿っている。そして全ての事柄にて省略形（略語）が使われている。綴りに係わることにおいて、文字 c, c, s, z そして ss は、資料に見られるように書き替えられた。不足の i, 余分な i, は不足の i の記号をもって書き替えられた。明白な書記法のもと代表とされる y は、このような y として再現された。しかしその単語であっても、i という音声的な意義をもっている。また u と v はその音声的な意義に従って書き替えられた。さらに不必要とされる h, ss, のような重ね文字、単語の初まりを除く文字 f, g, j, h, ph, th, x、縮約 desta, della, del, deste, quel, dellas, dellos などは保持された。（尚、本論文の原題は、Nota preliminar al personaje historico y los documentos<sup>15</sup>である。）

---

<sup>15</sup> Perdo M. Guibovich Perez, “Nota preliminar al personaje historico y los documentos”, en: Luis Millones et al. eds., *El Retorno de las huacas: Estudios y Documentos del siglo XVI*, Taller Grafico de Asociacion Grafica Educativa, Tarea, 1990.